

---

# 聖剣士物語

月夜魅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖剣士物語

### 【Nコード】

N5793Z

### 【作者名】

月夜魅

### 【あらすじ】

彼らは、世界を守る者。聖剣士とも、三剣士とも呼ばれている正義の存在。鋼の騎士、岩窟の騎士、新緑の騎士。そして……。この物語は、彼ら聖剣士の旅の記録。正義の生きざま、とくどくど覧あれ！！

\*更新〓月二回\*

## 1…古の剣士（前書き）

世界は闇へ落ち始めている……。

我ら、古の騎士いにしえが目覚める時が来た。

## 1：古の剣士

セイライ

聖頼 一〇二二年

ここは、中世の暮らしをするポケモン達が住む国。何もかもが同じではないけれど、よく似ている。そんなところです。

庶民、貴族、王族の階級があり、着ている衣類がそれぞれ異なります。庶民はボロ衣の服、貴族は華やかなドレスやまともな衣服。王族は更に華やかな、衣服に金や銀をちりばめたものを着ている。どの階級も、家は煉瓦や石造りが当たり前。

さて……本題に入りますか。

この世界には、【聖剣士の伝説】があります。地方によっては、【三剣士伝説】と呼ばれています。何千年も前から存在しているポケモンで、世界に危機が訪れる前触れが生じた時に、その姿を現すとされている。大昔にも、彼等は姿を現しています。

埃かぶった、分厚い茶色の本……。神々しい金の刺繍があるこれは、ポケモン達が語り継いでいる神話を集めた本。神集しんしゅうというもの。今私が手にしているのは、西の王が書いた神集です。

これの一部を読み上げ、物語を始めるとしましょう。

闇記<sup>あんき</sup>三七年。世界は戦いの炎に飲まれていった……。世界の全てを我が物とするため、二人の王が各国を制圧していった。天下統一のために……。

最後に、自分達の国が残った。

二人の王はついに激突。戦場には、彼等を待ち構えていた三人の騎士が立ち塞がっている。

青く輝く剣で、彼等は両軍を攻撃。息をつく間もなく、圧倒的な力でねじ伏せた。

我に帰った二人の王は、過ちに気がつき三騎士に誤りました。

『もう二度と、こんな馬鹿な真似は起こさない！争いはしないと、王家で代々受け継ごう。』

青き鎧を纏う剣士は頷いた。名を教えてくださいと王が頼むと、青き騎士は言った。

『我々は、名を刻めるほどの地位にいない……。』

去っていく彼らを、我々はこう呼ぶことにした。『鋼の騎士』、『新緑の騎士』、『岩窟の騎士』。

世界はみんなのもの。他人の居場所を奪うことは許されない。

この神話を聞いた時に、皆、目を閉じて思い出すといい。戦争の愚

かさど、虚しさを……。

## イメルラ国

中世の暮らしをする、ポケモン達が住む場所。ここの王はバンギラス。かつて、世界を我が物としようとした一族の末裔。今日も彼は、窓ごしに庶民の野次を聞く。

「労働条件をもっとよくしろ!!」

「女だって働けるわ!女性ポケモンが働ける場所を作ってちょうだい!!」

「金も食事も足りないんだ!!」

ボロ衣の服や石のアクセサリーを付けたポケモン達。庶民の野次は、傍らにいる執事のヤンヤンマが全てメモを取る。

「全て聞き受けました。」

「わかった。……庶民よ!!お前達の全て願いは聞き受けた!!!今すぐにはいかないが、検討しよう!!」

その頃……

大人達が城に集まっている頃、庶民が住む町エルテナーでは……の、前に。エルテナーについてお話ししなくては。

エルテナーとは、この国の言葉で『影』という意味。石を積み重ね、セメントで固定しただけの四角い家で、エルテナーのポケモン達は暮らしている。

町に華やかさは無く、質素な雰囲気。店といえる店も、仕事だつてあまりない。そんな町だからこそ起きる、子どもが犯人の事件。

木の実を売る市場で、窃盗が起きた。窃盗を見たサイホーンは、ボロボロのローブを纏う小さなポケモンを追っていた。見えるのは、馬のような小さな脚四本のみ。青い蹄と白い脚……。このポケモンは一体？

「待てー!!」

「待てと言われて待つ奴いないよ！」

全速力で土を蹴り進む、ロープの子。路上の前を通り過ぎるこの子を、とあるポケモンが間近で見っていた。青き体の、紳士的なポケモンだ。路上を出て、皿になった目であの子を見つめていた。

「どうしたの？コバルト。まだ姿を現しちゃいけないんじゃないかなかった？」

「あ、嗚呼。今行く……。」「

路上に戻り、上の空。緑のポケモンに、どうしたのさ？と聞かれるも、何も言わず。

「コバルト。」「

「?!嗚呼。すまない。」「

「どうしたの？さっきから……。早くキオルと合流しよう。彼もも

う、眠りから覚めて神殿にいるはずだよ。」

疾風はやての如く去る、緑のポケモン。それを追うは、青きポケモン。彼等の跡を追い駆けてみましょう。

### シンラの遺跡

万物を司る者が舞い降りる。そう伝えられている神聖な場所。中は華やかな広間と祭壇のみ。

「遅い……。遅いぞ！！何やってんだあ？あの二人。」

広間の中を行ったり来たり。彼はテラキオン。茶色の大きな角を持つポケモン。ガツチリとしたたくましい体をしている。眉間にシワを寄せてうるついている彼の元へ、あの二人がやってきた。

「やっぱりいた！ごめんキオル。遅れちゃって。」

「バジル、コバルト！！五分も待たせるなんて酷いぜ?!」

「すまないと言っているだろ……。」

青きポケモンはコバルオン。長く立派な角を持ち、胸には白い毛。緑のポケモンはビリジオン。華奢で身軽そうな体をしている。

コバルトが正面のステンドグラスを見つめると、二人もつられて見つめる。

三枚の描かれているのは、神と呼ばれし二十四人のポケモン。左右に十二人づつ。そして、真ん中のガラスには……。

「アルセウス様。」

バジルがつぶやく。神の名を。

世界創造の瞬間を描いたと言われている、このステンドグラスに向かって跪く三人。目を瞑り、天へ祈りを捧げた。

「……さて。」

早々と立ち上がるコバルト。二人の間を歩き、出入口へ。祈りを早く切り上げたコバルトに動揺し、バジルはあとを追う。それに続き、キオルも走る。

「ちょ！コバルト？！どこ行くのさー！」

「こらーッ！俺をおいてくなあーッ！！」

神殿から二キロ離れた谷。下が見える高さで、黒い何か谷底を進んでいるのが見えた。

上で見下ろすコバルト達。目をこらして、あれが何か模索する。

「戦車……？無益な争いはしないと一言いながら、まだあつたのか？」

顔をしかめ、キオルは黒いモノを目で追った。「どうする？」と、バジルはコバルトに……あれ？

「……いない?!?!」

「今日のコバルトおかしいんだよ!……あッ!…!戦車追いかけてる  
!?!?!」

「急ぐぞバジル!…このままじゃ見失っちゃう!?!」

### スクラップ置き場

町外れのスクラップ置き場。ゴミの山があちこちにある、腐敗した場所。まだ新品なのに捨てられたテーブルに布を貼り、小屋にしてあの子は住んでいた。盗んだ木の実を食べて、一人で生きている。

「ふう……。あの人は上手く巻いたし、今日はもう寝よう。」

ローブを着たまま、スヤスヤ寝息を立てて眠る。時間は漂う雲のような早さで、ゆっくりと流れる。音もなく、風も無い。そんなスクラップ置き場に、不穏な動きが……。

鬱<sup>うつ</sup>金色の土を踏みしめる、鉄の鎧を纏うポケモン達……。数は九

人。その中に、紫色の鎧を纏うポケモンが二人いた。このポケモンは、アーボックとハブネーク。

「……ハブ。こんな場所にあるのか？」

「殿下が直々におっしゃっていたのだから、間違いは無いかと。さあ、進みますよ?」

何かを探しさ迷う、謎の軍隊。真後ろのゴミの山の影には……コバルトの姿が。裏から出て、冷徹な眼差しで軍隊を見つめる。

「コバルトー!!」

「……バジル、キオル。」

「さっきからおかしいよ?! どうしたのさ。」

「ちょっと、な。」

コバルトの眼差しは、未だ遠くの軍隊に向けられている。二人の仲間の話を聞かず、ゆっくりと、鬱金色の土を踏みしめて歩く。

軍隊を追うために。

軍隊は、ゴミの山を見て歩いてきた。ふと、アーボックが目を向けたゴミの山に、住処であるテーブルが視界に入る。

「……？ハブ、あれ見ろよ。」

「？」

ゆっくり近づくと足音……。気がついていたのか、あの子は起きていた。

「おい！……」

軍隊に取り囲まれ、ローブの子は怯え始める。

「……青い蹄。あの一族の生き残りか。」

「あの一族？」

「このガキを連れていけ！！光の欠片についてわかるはずだ！」

「え？何？！離してー！！」

兵士によって引きずり出され、足を縄で固定される。そのまま宙吊りで運ばれてしまった。

何も無い平地。そこには、黒い戦車が二台停まっている。

「その子は何も知らないよ。」

突然の声で、軍隊達は豆鉄砲をくらったように驚く。あそこだと、ハブネークは戦車の上を見つめる。いたのは、鎧を纏う三人のポケモン。凜として立つその姿は、神話に描かれているポケモンに似ている。

青い鉄、ミスリルの兜と靴、膝当てを付けた青き騎士。同じ装備で、銅の騎士と緑の騎士がいる。緑の騎士は、軍隊にこう言う。

「もう一度言っよ。その子は何も知らない。君達が探している石は、僕ら聖剣士が持っている。」

「聖剣士?!ま……まさかッ!!」

「そう……。我らは神に選ばれし存在。悪を許さず、正義を貫く者  
!!!」

青き騎士は、瞑っていた目を開らき、冷徹な眼差しを鬼のような睨みに変える。紫の鎧を纏う二人以外の兵士は、怖じけづいて動けなくなった。

「なっ、何を怯んでいる?!アイツらを……。」

「俺達が……何だ?」

いつの間にか、銅の騎士がハブネークの傍に。刃になっている、大きな角を喉仏に近づけていた。

「いつ……から……?!」

「何が目的だ？首を吹っ飛ばされなくなかったら……。」

ハブネークを守ろうと、横からサイホーンが突進。まともにくらった銅の騎士は、地を転がり回り岩に激突。彼がぶつかった衝撃で、岩は粉々に粉碎。

「いったあつ！」

「久々だから感が鈍ったみたいだね。岩窟の騎士、本当の突進つてやつ見せてやりなよ？」

「あいよ。」

無傷な銅の騎士に啞然とする軍隊。その最中、蒼騎士あおきしが縄を持つ兵士へ向かった。疾風の早さで背後へ回り、手加減して背に頭突き。

衝撃で手放されたあの子を、蒼騎士が背中で受け止める。

「き……貴様……！」

「……。」

悪役ではないのに、蒼騎士は兜の隙間から冷酷な瞳を見せる。彼の睨みに恐怖を覚えた兵士は、もはや弱者同然。怯えて震え上がっている。やがて後ろへ傾き、尻餅をついた。

瞳はそのまま、蒼騎士は辺りを見渡す。すると、周りの兵士も怖じけづいて、後退りする始末。

「テメエら、相手は蒼騎士じゃない俺様だ。……来なッ……！」

岩窟の騎士に言われ、蒼騎士から離れる兵士達。ロープの子へ目を向け、「大丈夫か？」と一言。蒼騎士の瞳は、冷静さを取り戻していた。

二人の騎士はバトルの真っ最中。岩窟の騎士は不特定多数の兵士を、二人のリーダーは緑の騎士が相手をした。騎士を睨むアーボツ

ク、息を飲んでからハブネークにこう言った。

「気をつける。あのデカイのが岩窟の騎士なら……コイツは新緑の騎士だ。」

「何?!」

笑みを浮かべ、新緑の騎士は陽気に振る舞う。

「ピンポン。あつたり〜。……なんて、呑気にしてられないか。君達の相手は僕で十分。蒼騎士がでるまでもない……よね?」

遠くの蒼騎士に問う。頷いて直ぐ、蒼騎士はロープの子を背中から下ろした。兜を少し上げて、口で縄を噛みきる。

一方、兵士達は岩窟の騎士に向かって猛突進。それを見た彼は、「やっぱこの程度だよなあ。」と、苦笑い。

「突進つてのはなあ……。こうやるんだよおッ!」

無駄な動き無くスタートダッシュ。もの凄いスピードで兵士達へ突っ込んだ。彼の突進で、兵士達は宙を舞う。アーマーは碎け散り、無防備の状態に。幸い怪我は無かった。

強烈な突進力に負け、地面に叩きつけられた兵士達。全員目を回して気絶ダウンしている。岩窟の騎士は今、ブレーキをかけるのに必死そう  
だ。

ザザアアアー……

「……ふう。どんなもんだいッ!」

「遠くで威張ってるし。……さて、やりますか。どこからでも掛かって来なよ。」

「みくびるなよ?!」

ハブネークとアーボックは、毒の牙を繰り出す。新緑の騎士は余裕綽々。迫り来る二人から逃げようとはしなかった。

後ろ脚で地面を蹴り、反動を利用してばく転。ギリギリ当たらない距離で舞かわした。

うそ……だろ?!

こんな近距離でかわした?!

その場に着地し、新緑の騎士は額に太陽の光を集める。

「まずい!次が来るぞ?!」

「今頃構えたって遅いよ……?正義の鉄槌<sup>てつづい</sup>、受けるがいいッ!」

振り返って、ソーラービームを放つ。ハブネークだけ、間一髪で避けることができた。避けるのに必死だったため、こけて頬を擦りむく。

「ボラン!!」

「仲間を気にしてる場合？」

起き上がったハブネークの背後には、新緑の騎士。青白く輝く角を叩きつけ、切傷を負わせた。鎧のおかげで、傷は浅い。

「こ……これが、古いにしえの力……か……。」

ハブネークダウン。辺りを見渡してから、新緑の騎士は一息つく。全員、蒼騎士の元へ歩いた。

「終わったよ。コバルト。久しぶりのバトルだったから、腕が落ちたかな？ 僕ら。」

「だな。……で、コバルト。言われた通りにやったはいいがよ。このガキがどおした？」

前脚で起用に兜を上げ、素顔をさらけ出す。なんと三剣士は、あ

の三人。コバルト、キオル、バジルだった。彼らを見たロープの子は、驚いている様子。

「……………名は？」

「え？ボク……………」

「いいから。それとも、私から言うか？もうバラしたに等しいしな。この二人が……………」

冷めた目で、バジルとキオルを睨む。コバルトの睨みに耐えられるのは、この世界に二人しかない。

「仕方ないじゃないか。ね？キオル。」

「気が抜けたって言うか……………なんてーか。」

「お前らしばくぞ？……………まあ、今回は仕方ないか。少年。私は鋼の騎士コバルト。またの名を蒼騎士。銅の彼はキオル。岩窟の騎士。緑はバジル。新緑の騎士だ。……………君は、水の騎士の末裔だね？」

コバルトの言葉に疑問を抱き、二人の騎士はローブの下にある脚を見る。気がついたのか、二人は顔を見合わせた。

「水の……？ボク、自分のことわからないんだ。親はいないし。あと、このローブ……」。

絶対に脱ぐなって、育ててくれたおじいちゃんが言った。「」

ローブの子の話が終わると、コバルトはローブごと項をくわえた。戸惑うこの子を無視して、コバルトは歩く。バジルとキオルは、また慌てて追いかける。

「あの……コバルトさん？ボク……」。

「さんは余計だ。呼び捨てで構わない。」

「ちょっとコバルト、その子どうするの？」

バジルが問いかけるも、コバルトはまた無視。

ローブの子の家があるスクラップ山に着き、コバルトは彼を優しく

下ろす。ローブの子は、家の中へ入り座った。コバルトもその場に座り、少し話しをしていいかとバジル達に言う。

「いいけど……。」

「おう……。」

「ありがとう……。少年、名前は？」

「リオ。」

「リオ……。家にある、その箱は？ネツクの飾りになっている、それ。」

木の実を入れるビンにかけている、古びたネツク。コバルトが指摘するそれを取り、リオはコバルトに手渡した。前脚で小さな箱を開けると、レモン色に輝く小さな欠片が出てきた。この欠片を見て、コバルトの予感確信に変わる。

バジル達に、考えていたことを全て伝えた。

「あの時代で、我々が悪用されぬよう砕いたあれだ。我々も持っているから、わかるだろう？他にも騎士がいたことは覚えているか？路上からこの子を見ていた時、似た波動を感じたのだ。だから、あんな行動をした。もし未裔なら、我々が守らねばならないと思っ  
ね。」

箱のフタを閉めると、リオの首にかけた。そして唐突に、「共に来ないか？」と言う。ビックリしたのはリオだけじゃない。キオルもだった。

地団駄を踏んで、コバルトを引きとめようと試みるも、彼の心へは届かない。

「待て待て待て！！このガキ連れてくのかあ？！俺達の旅は危険なんだぞ！！」

「まだ子どもだ。光の欠片を持っているのだから、いずれ奴らに狙われる。何故欠片を狙うのか……それが気がかりだな。ともかく、リオを守る大人が必要だ。……すまないな。勝手に話しを進めてしまつて。決めるのは君だ。明日の夜まで待とう。その間、君に何かあつたら我々が守る。いいね？」

「はい……。あの、光の欠片って？」

「また明日話そう。今日は、頭の中を整理するといい。一度に色んなことが起きたから、混乱しているだろう？ 私も考える事があるから……。」

夜

コバルトは、スクラップ山の頂上で満月を見ていた。雲一つない星空は、光に満ちていて綺麗だ。リオは、家の中でコバルトを見つめている。

残りの二人は、遠くのスクラップ山にもたれて寝ていた。キオルのやかましいイビキを気にせず、バジルは眠る。

あの軍隊……。あの鎧……。……欠片を狙う理由は、恐らく……。

考え中のコバルト。月を睨んで様々な仮説を立てている。一方リオは、育ててくれたおじいちゃんの話しを思い出していた。死ぬ前に言っていた、大切な言葉を。

## 回想

『リオ……。これから先は、古の三剣士いにしえを待ち続けなさい。彼らと共に生きなさい。このネックは、絶対になくすんじゃないよ?』

『うん。』

『そのローブは、時が来るまでお前から離れないだろう。その時までの辛抱じゃ……。……わかったね? リオ……。』

27

「……おじいちゃん。ボク、おじいちゃんを信じてみる。行くね?」

家から出て、リオはコバルトの名を叫んだ。響き渡る叫びを聞き、バジルとキオルが起きる。

「どうした? リオ。」

「コバルト、ボク……。一緒に行くよ。ボクの役目、見つけたいんだ。ボクが何者なのか……。ちゃんと確かめたい。」

「わかった。では明日、旅の目的と理由を話そう。今日はもう寝なさい。私は大丈夫だから……。」

「うん。おやすみ。コバルト。」

T o b e n e x t

## 1：古の剣士（後書き）

### 【次回予告】

リオ

「光の欠片って何？」

旅をするのは何故？

何と戦うの？

ボクは……何者なんだろう……。

次回もお楽しみに！」

聖剣士とリオ

「剣よ、闇を切り裂け！！」

## 2：コバルトの仮説（前書き）

僕らは聖剣士。

正義のためならば、命だって投げ捨てられる。

## 2：コバルトの仮説

朝

聖剣士とリオは、イメルラの城下町にいた。リオの服装は庶民。もちろん、回りから出ていけという目付きで見られた。

コバルト、バジル、キオルは貴族服。が……みんな別々の国の服を着ている。

まずコバルト。彼はこの地方の服装だ。

脚には金のアンクレット。エックス型のもので、ダイヤモンドがちりばめられている。黒いシルクハットには、赤い帯。美しく輝く羽のブローチが付いている。

次にバジル。和装という、アジア地方独特の服装らしい。

前脚に桜舞う布のアンクレット。首には白いファーを巻いている。成人式の日、女性が首に巻くあれだ。桜のブローチでファーをとめている。

最後にキオル。ラグレム地方の服装らしい。  
頭にウエスタンハット。……それだけ。

「まさか神殿に、我々の私物が封印されていたとは。あの人の気遣いに救われたな。」

「うん。……キオル。いつも思うんだけどさ、もっとマシな服装は考えつかなかったの？」

「俺様はこれが限界なんだよ！！ガタイ見てみる？なあんも着れねえさ。」

「そ、そう……。ねえ、リオに何か買ってあげようよ。庶民らしさをちよつとでも無くさなきゃ、この時代でも厳しいみたいだし……。ローチエ地方の服装なんてどう？水の都と言われてる国だよ。」

「しゃしゃり出るバジル。口をぽかんと開けて、コバルトはちよつと驚きぎみ。」

「相変わらず情報が早いなあバジル。あー、コバルト？」

「ん？」

「あのスクラップ置き場で見つけた通貨、あるか？」

「たった三八カランで何を買った？」

目を細め、キオルに言う。この世界の通貨は様々。Pポケを共通通貨としていたけれど、普段は国が持つ個人通貨を利用している。イメルラ地方は、カランという平らな白石を使用。

「リオにはネックレスがある。イメルラの銀と銅でできているから大丈夫だ。またいずれ、ちゃんとした物をあげよう。そのローブが取れたらな。」

コバルトが放つ、精一杯の微笑みはリオに。嬉しくなり、リオは無邪気にコバルトの回りを駆けて回った。

「わあーい！服だ服だー」

「リオ、ここは城下町だからはいじゃいけない。控えるんだ。」

「はいー」

歩き出し、コバルト達はこの城下を出ることに。小さな足で一生懸命ついで行くリオ……。バジルはリオの歩幅に合わせてやり、二人で会話を始める。

その前で、コバルトとキオルが小声で会話。綺麗な町に合わない内容である。

「コバルト、あの軍隊……。」

「ああ。光の欠片は、この世界の力。聖なる宝玉……。それを狙う理由はたぶん……。」

「世界征服。だな。」

「おそろくな。私達は、これを阻止するために目覚めたのだろっ。欠片を軍隊より先に集め……。封印する。という道理だな。」

「なるほど……。バジルとリオにも話さなきゃな。ここを出たら、人気の無い場所で。」

「うむ。」

## エルサの森

町で暮らさず、ありのままの生き方をするポケモン達が住んでいる森。ありのままということは……言わずともわかりますね？コバルト達は、ホタチ池と呼ばれている場所に来ている。ミジユマルの持つ貝ホタチ形の池だ。

「さて、何から話そうか……。」

「コバルト達のこと教えて。三剣士とか聖剣士とか騎士とか……。色んな呼び名があって混乱しちゃったよ。」

子犬座りをして、リオは頭をくるくる回した。みゅーんって、可愛らしい効果音まで言いながら。

笑うコバルトを見て、バジルとキオルはビックリしている。

本来彼は、あまり感情を表に出さない人柄。冷静沈着で、表情なんて滅多に変えない。故にぶきつちよ。

「わかった。……我々は聖剣士。悪を許さず、正義を貫く者。三剣士というのは、もう一つの呼び名だ。私達は、個々に通り名を持っている。例えば……私なら鋼の騎士。この三人の中では、蒼騎士と言っている。」

「騎士は、個人の名前ってことだね。ボクは新緑の騎士。キオルは岩窟の騎士。三人合わせて、聖剣士。またの名を三剣士。それだけさ。……それよりコバルト。」

「ん？」

「あの連中、光の欠片を狙ってたよね？ひよつとして……。」

ホタチ池は、たちまち緊張感走る空間に。コバルトは、真剣な眼差しで三人を見渡す。少し考え、話し始める。

「……。今から、私が立てた仮説を話す。これが終わったら、ミュシエーニの町へ行こうと思う。いいな？」

「うん。」

「了解だ。」

バジルとキオルが返事。リオは頷いただけ。

「光の欠片は、聖なる宝玉を砕いたもの。悪用されるのを防ぐため、我々が先読みして砕いたのだ。リオは一つ、我々は三つづつ所有している。」

37

この欠片には、我々ポケモンの力を増幅する効果がある。宝玉となればどうなるか、わかるな？」

「なんか大変そうだね……。」

「大変どころじゃないぞ、リオ。奴ら……あの軍隊はこれを探していた。とすれば、だ。奴らは何かしら企んでいるに違いない。リオをあんな目に合わせたんだ。悪の可能性はなきにしもあらず。情報を集めて、最終的に判断するがな……。」

言いたいことを話し終え、一度一息つく。

「何が言いたいかはわかったな？これより！！我ら聖剣士は、軍隊より先に欠片を集める旅を始める。永い旅になるが、世界のためだ。みんな、頑張ろう！」

コバルトが左足を差し出すと、バジル、キオルも同じようにする。互いの足を重ね合わせて、円陣を組んだ。きよんとするリオへ目を向け、聖剣士は無言で誘う。状況がわかっていないリオは、正面にいるバジルを見つめていた。

「円陣に入っているんだよ。まずは見習いからだけど、君も同じ剣士なんだからね。足、届かなくて大丈夫だから。」

「えっと……。はい！」

元気よく返事をし、円陣に加わったりオ。天高く前足を上げた。

「よし……。正義のため、行くぞッ!!」

「オオーッ!!」

上空

遙か上空で、聖剣士を見張るリザードン。赤い鎧を纏っていた。腕時計型のトランシーバーで、何者かと連絡し合っている。

「聖剣士の復活を確認。例の子どもも一緒です。毒部隊の報告書通り……。あの一族の末裔ではないかと。」

ザザッ……

「一度、ミュシエーニへ戻れ。聖剣士のことだ……。組織の計画は薄々気づいているはず。邪魔をするようであれば、即刻排除するのだ!!」

「承知しました。」

通信を切り、リザードンは東へと飛んだ。どうやら、コバルトの予想は黒だったようだ……。

## 豊穣の町

### ミュシエーニ

イメルラの食料庫と言われている町、ミュシエーニ。季節に合わせた木の実や薬草を育て、全国へ向けて貿易船を走らせている。今は冬。皮が固い木の実を多く栽培している。

40

「ミュシエーニに着いたことだし、食料確保しない？お腹空いちやっただ。」

「そついえば、私も……。」

「ボクもー。」

ぐう~~~~…

とても大きなお腹の音を聞き、リオがビククリしてピョンと跳ねた。バジルは笑いを堪え、コバルトは犯人を冷めた目で見る。

「……キオル。腹で返事をするな。」

「へへっ！わりいわりい。」

鮮やかな茶色の煉瓦家。農業が盛んな場所なので、さほど貧富の差はなく見える。町には、ツリーに飾るような光のイルミネーション。冬を統べる龍、キュレムと思われる飾りもあった。

パン屋によつて、持ち金で買えるだけパンを買う。それが終わると、近くの公園へ向かった。

公園の芝生の上に座り、四人は食事をすることに。前足で紙袋を開けて、バジルは三人にパンを配る。

「はい、リオはくるみパンね。」

「ありがとう！バジル。……わぁー。こんなの食べたことないよ！」

くるみ入りの丸いパンに興味津々。キオルはさっそくドカ食いついていた。

「キオル……。はしたないぞ。」

「ン？%# ¥〜？」

「……。神経質だと言いたいなだな。」

「ふぁーら（そうだ）。」

コバルトも包みを開け、パンを食べ始める。急がないといけないうつのに、上品な食べ方。

型にしっかりとハマっているコバルトだから、型破りなキオルとはちよつと合わないんだ。と、バジルがリオに教える。

「こんなにバラバラな性格だけど、仲良しなんだよ？僕達。たまーに二人が喧嘩するくらいでさ。」

「バジルは？」

「僕？僕はあまり争いは好まないから。正義のための戦いは、別だけど。早く食べちゃお。軍隊について情報を集めなきゃ！」

と、言いつつ。バジルは二人に注意。彼のおしとやかな怒鳴り付けは、不思議なことに、有権者である二人をビビらせた。

「キオル、喉詰まりしたって知らないからね？！コバルトも、急がないといけないんだよ？！」

「……はい。」

「まったくもう。」

こうして、公園に静かな時間が流れ始める。くるみパンを食べながら、リオは聖剣士を見渡した。

リーダーはコバルト。キオルは重戦車。バジルは……？リオが出し

た結論は、影のリーダー。

あの一言でみんな普通になっちゃったんだもん。バジルもリーダーなんだ。きつと。

「七百年ぶりに怒鳴られたな。」

「あれ以来聞いてねえからなあ。国同士の戦争を止めに行った……あれ。」

「ふふふ。あまり怒らない人から言われると、案外怖いものだよ?」

前言撤回。リオは、ただ怖かったただけなんだと悟った。ローブの中、目を点にして聖剣士を見ていた。

五分後

聞き込み開始。リオはコバルトと行動している。人から人へ、店の中まで聞き込みをし……。得た情報は無し。

歩き疲れたリオを背中に乗せ、コバルトはミュシェーニの町を歩く。エルテナーとは違う、質素でも豊かな風景。みんなが笑顔で暮らしている、幸せな場所。けして裕福ではないけれど、華やかな暮らしではないけれど、みんな明るく生きている。エルテナーには無い、小さな幸福。

「……。」

「リオ。」

「え?!……何?」

「羨ましいか?ここのポケモン達が。」

「……うん。」

「ミュシェーニは、イメルラの城下から離れている。国の中心から遠いと、こういった独自の発展ができるんだ。イメルラとは違って、貧富の差はさほど無い。しかし、けして裕福な暮らしではない。見

てわかるね？」

明るい風景の片隅には、路地裏で生活する子ども達がちらほら。やはり、影はこの町にもあるのだ。パン一つで、子ども達が喜んでいる。そんな生活を影で……。

「あの子どもには、親はいない。捨てられたか、早くに他界したか……。ああして力を合わせて暮らしているんだ。……リオ、私は七百年以上も生きてきた。貧富の差はどの時代にもあるが……これは無かった。民の意を聞き流しているとしたか思えない。……ああ、すまない。つい難しい話しを。」

「平気だよ。コバルトって、色んなこと考えてるんだね。ポケモン達のこと、ちゃんと見てるもん。コバルトが王様だったらいいのになあ。」

無邪気な言葉。コバルトの顔は曇り、「そうか」と力なく言った。リオはきよとんとしている。

……。わかっていきます。アルセウス様。人には、生まれ持つ運

命がある。我々はただ、正義へ進むのみ。

s a i d    バジル

聞き込みに夢中で、中心部から離れてしまったバジル。ただいま、中心部まで戻っているところ。

「真剣になると回りが見えなくなるんだった。僕。それなりに収穫は得たし、コバルト達を探そう。」

?!

十字路の中心にきて、辺りを警戒。なんのへんてつもない路地裏に、違和感を覚えたのだ。壁が高く、豆電球程度の光しか届かない暗がり、バジルは一人身構える。

ポケモンの気配がする……。だけど、どこにもいない。障害物

なんて見当たらないし。

この波動……闇に染まっている。あの軍隊か?!……どこだ?どこにいる?!

どこかわからない場所。バジルの頭に手をかざすポケモンの影がある。三色の指を点滅させ、バジルを攻撃した。

ドクンッ

「ううッ!……く……。」

崩れ落ちるバジル。彼が倒れたのを察知したかのように、風景が変わった。腐敗した、殺伐とした路地裏に変わっている。ゴミの山が、壁の所々に寄りかかっていた。

襲い来る激しい頭痛と、締め上げられる首……。二つの苦痛に耐えるが、徐々に意識が遠のいていく。

そんな彼の元に、二人のポケモンが姿を現した。

「聖剣士、確保。」

「あはは。アークの幻影は、見破れなかったみたいだねえ。」

白い鎧を纏ったポケモン、ゾロアーク。背には大きな斧。全ては、彼が見せていたマヤカシだったのだ。緑の鎧を纏ったポケモン、オーベム。バジルを攻撃したのは彼女。

「……知りすぎたよ。アンタ。」

「そうそう。死なれたら困るから、手加減して首を締め上げといたよ。新緑の騎士……バジル・フォレストスさん。」

かすむ瞳で、バジルはカー杯睨みつける。ほぼ無抵抗な彼を嘲笑うオーベム。少し狂っていた。

「なあに？？そんな状況でやり合おうってどういうの？バツかじゃない？！」

「聖剣士を……舐める……なよ……ッ!!」

額に光を集め、ソーラービームを放とうと試みる。オーベムは一人、冷めた目付きでバジルを見つめ、再び手をかざす。指が点滅すると、バジルは苦しみもがきだした。

「ああアアアアッ!!!」

「……死にたいの？君。大人しくしてよ。君が得た情報全て……消さなきゃいけないんだから。ウチら、【闇纏う騎士団】の情報をさ……。」

s a i d    コバルト

「コバルトー!!」

の太い声が、コバルトの動きを止める。振り返った先には、ブレーキを掛けて進むキオル。町中のポケモン達が道を開けて、彼を見つめていた。

「あの馬鹿……。」

危ないと予知して、コバルトは五歩前へ出る。

キイイイイ……

「っただあ止まった。」

「止まれなくなるなら走るな。……情報は？」

「バツチリさ！！バジルは？」

首を振り、背に乗せたりオをチラ見。

「ありゃ？歩き疲れたか。」

「うん。こんなに長く歩いたこと無かったから。」

「キオル、公園へ戻ろう。バジルがいるかもしれない。」

「ガッテン承……。」

?!?!

コバルト、キオル。揃って辺りを見渡し警戒。互いの背中を預けて、三六〇度監視する。

二人の前から武装兵士が走り来る。紋章が刻まれた盾を見つめ、二人の聖剣士は警戒を解いた。リオはというと、コバルトの背で怯えていた。

「……………困まれちまったな。」

「構わん。手荒な真似はするなよ？イメルラの宮兵だ。」

「……ずいぶんと詳しいな。密告者、我々とイメルラ城下へ来てもらおうか。どうやって来たかは知らないが、民を誘拐した罪は重いぞ?」

コバルトとキオルは、顔を見合わせた後で高笑いした。二人の行動を見た宮兵はざわめく。

「なっ……何がおかしい?!」

「お前らよめ、誰が密告者だって?俺様達がわからないか?」

「……?」「」

「どつやら、わからないようだな。……この子を頼む。」

「あいよ。」

少しかがみ、コバルトはリオをキオルに預ける。項をくわえられ、リオは宙ぶらりん。

「……さて、この愚行をどう償ってもらおうか。」

闇を纏った、コバルトの冷酷な睨み。鍛え抜かれた宮兵さえもかなわない、身も凍る恐怖。何があったかわからない背後の宮兵は、怯むなと怒鳴る。

「だ……駄目だ。かなわない。」

「コイツ、強すぎるんじゃないか……?!」

「よしやれッ!」

コバルトの合図で、キオルは小走りで突進。体を横に向けてスライディングタックル。宮兵は、石ころのように町中を転がり回った。

「手加減したんだから、大目に見てくれよな？俺達には急用があるんで。」

背後の宮兵に言い、先に走り去ったコバルトを追いかける。  
公園へ着くと、コバルトしかいなかった。リオを降ろし、辺りを見  
渡す。

「あれえ?!バジルはまだか?!」

顔をしかめ、コバルトはまた走り去る。リオはまた宙ぶらりんに  
なり、キオルと共にコバルトを追う。

「なしたあ?!」

「宮兵だ。」

「はあ?」

「バジルは宮兵に捕まったのかもしれない。ちゃんと誤解を解かね  
ば、先へは進めない!リオは任せる!!私が直々に先陣を切ろう!  
!」

胸騒ぎがするのか、コバルトは少し焦っている。自分がしたこと  
は、正義に反するモノだ。軍隊について知るのも大事だが、誤解を  
解かねばバジルは助からない。  
ギリギリと、歯を噛み締めるコバルト。感情を押さえつけて冷静に  
振る舞う。

「イメルラ城下町へ行くこう。愚行をしたのは我々の方だ。」

「だな。ちったあ焦り過ぎたよな、俺達。」

「……バジル、大丈夫かな。」

s a i d   バジル

オーベムに記憶を消されたバジルは、イメルラ城の地下牢で眠っ  
ている。気絶した彼を、オーベム達が城へ突き出したのだ。イメル  
ラの住民に化けて。

「ふふ。アークの幻影凄いな。」

「できて当たり前だ。」

「……さあて。聖剣士は残り二人。そして、末裔が一人。あははは！ 獲物を横取りするって、楽しいなあ……でも。これ以上、手を出しちゃいけない。持ち場に戻ろう。」

オーベムの念力で、二人の兵士は上空から城を眺めていた。

空を飛び、彼らはミュシエーニをあとにする。果たして、聖剣士の運命は……。

T o b e n e x t

## 2：コバルトの仮説（後書き）

### 【次回予告】

リオ

「バジル、大丈夫かな？」

……コバルト、その目怖い。

ついに、敵の正体が……戦う相手が変わるんだね！

次回もお楽しみに！」

聖剣士とリオ

「剣よ、闇を切り裂け！！」

3：聖剣士と神集（前書き）

あはははッ！！

なあ〜んか、面白いことになったねえ

### 3：聖剣士と神集

#### 謎の場所

新緑の騎士<sup>バジル</sup>を襲った、オーベムとゾロアーク。廃虚となっている隠れ里で、誰かと会話をしている……。メンバーはこの三人。リザードン、アーボック、ハブネークだ。

「……………来たな。」

「お待たせー。会議って、なんの？みんな持ち場離れちゃって大丈夫？」

「お前だって離れてただろうがッ！！勝手に俺の獲物に手出しやがッ！！」

リザードンが吠える。オーベムは、怒られているというのにへラへラしていた。

「いいじゃん。ウチには記憶を操作する力があるんだから……。それに、聖剣士をイメルラで足止めしてやったんだから誉めてよね！」

「足止めって……。何をしたんだ？」

「ふふふ……。今頃アイツら、酷い目に合ってるはずさ。だって、正義の使者が悪人になっちゃったんだもの。あははははッ！」

## イメルラ城

コバルト、キオルの二人はなんと！地下牢にいた。バジルもいる。

「バジル！おい、しっかりしろバジル！」

バジルの体をゆすり、起こそうと試みるキオル。彼はまだ、目覚

める気配がない。

「……駄目か。」

何故、二人まで地下牢に入っているのか……。いきなりでわからない。そもそもリオは？あの子はどこに？

「……。」

### コバルトの回想

イメルラ城下に着き、門の前に立つ三人。門番のサイドンとエルレイドに槍を向けられても、聖剣士は動じない。コバルトの後ろに隠れ、リオは彼らのやり取りを聞いた。

「わざわざ城へ来るとはな！不法侵入の密告者めッ！！」

「……………。（落ち着け、私の理性。）」

「俺様達は密告者じゃねえ！ちゃんと誤解を解こうと思って来たんだ！それに、このガキは俺達の兄弟……………てか、なんてーか。とにかく、親戚みたいなもんなんだよ！！拉致とかじゃねえからな？！」

「嘘をつくな！！見知らぬポケモンが、エルテナーで誘拐事件を起こしたと通報が入っているんだぞ！それに、その時代遅れの服装……………。どう見たって怪しい！」

「あの緑の奴同様、地下牢にでも入っているツ！！民は解放する。いいな？！」

どこからともなく兵士が集まり、コバルトとキオルは連れ去られてしまった。リオは、メイドのタブンネに優しく抱えられる。

「は……………離せッ！！私達は密告者ではないんだッ！！話を聞いてくれ……………」

「イダダダダダッ……………首に縄が……………」

押さえつけられ、首に縄を掛けられて無理矢理引つ張られる二人。  
これでは本当に悪人だ……。

「コバルト！キオルー！兵士さんやめて！！あの人はボクを助けてくれたんだ！！」

「洗脳されているな……。タブンネ、国王様の元へお連れしろ！」

「かしこまりました。」

「え？！ち……違うよー！」

そして今……

こうして、聖剣士は不本意にも……悪人というレッテルを貼られてしまったのだ。

思い出して腹が立ち、コバルトは四五回、本気で壁を蹴り付けた。壁には、くつきりと足形が残っている。軽いヒステリーを起こしたコバルト、息を荒くして壁を睨むしかなかった。

「何故だッ?!」

「おー……。見事に爆発したなあ。」

「呑気にしてなどいられんぞッ!! 私達が……。私達が悪だと……。ふざけるなああーッ!!!」

今度は鉄格子に体当たり。壊れはしなかったが、グニヤリと大きく曲がってしまった。

押し殺していた感情は、強烈な怒りとなり発散。コバルトは疲れきって、ボタンとその場に倒れる。

ビビったキオルは、思わず前足で顔を覆っていたようだ。そつと頭を上げて、疲れ果てたコバルトを見据える。

「コ……コバルト?」

「……ハア……ハア……」。

「おおお前が本気で怒るなんてよほど屈辱だんだな……。ま、まあ、実際俺だってくく悔しいさ。」

声がガタガタ震えていて、棒読みな喋りになってしまった。自分をなだめるため、一度深呼吸。頭をかきむしって牢を見渡す。

岩の煉瓦で出来た十畳の空間。明かりは一本のロウソクのみ。コバルトが体当たりしても壊れなかった、鉄格子の扉……。キオルは一人、時代の流れを感じ取っていた。

「はあ……。何が何なんだよ、つたく！あー、軽く発狂したんじゃないかオマ？状態やばそうだぞ……。治ったら言えな？バジル起こして、先に話すすつから。バジル、バジル起きな！おい！！」

「んん……。あれ？こじは？」

ゆっくりと起き上がり、バジルは辺りを見渡した。まずコバルトを見つめ、「あーあ」と苦笑い。

「プライド高いわ、ルールの型にハマり過ぎだわって……。災難だったね、コバルトは。」

「お陰様でほら、一発ダウンよ。そつとしとこーぜ。今だけは。」

薄く目を開けて、コバルトは何か言いたげな表情をしている。二人に安静にしてると言われて、仕方なく眠った。

「……で。情報は？」

「ごめん収穫無し。実はね、町中を歩いてたら警官隊に襲われちゃって……。気がついたらここにいたんだ。聖剣士を密告者扱いするだなんて、酷いにも程がある。」

「やっぱりしかあ。コバルトの言ってた通りだぜ！」

「感がいいからね。キオルは何か？」

「収穫してきた。怪しい兵士が、使われなくなった鉦山へ向かって行ったってただがな……。赤い鎧のリザードンがリーダーっぽいぞ。」

「僕らと同じ、色つき鎧の？！じゃあやっぱり！」

「ああ！鉱山の名前は、フレイマウンテン。二十年前までは、進化の石が発掘されていたらしい。石絡みだから間違いない。光の欠片を探してるんだ！！」

ギイー……

どこかで扉が開いた。バジルは、音がした方へ歩きなんなのか確かめる。明かりに照らされ、二人のポケモンがこちらへ向かってきた。

「リオー！！」

「バジル、キオル！……あッ！コバルトー！！」

焦るリオ。小さな脚を隙間に入れ、コバルトの額を懸命に叩いた。

「コバルト！コバルトー！」

「ん……。リオ？」

「よかった！またボクを助けようとしたんだね？……ごめんなさい。ごめんなさいコバルト。」

リオがうつむくと、ローブから涙が滴ってきた。泣きじゃくるリオを見て、コバルトはぼかんと口を開けていた。

理性が帰ってきて、徐々に笑みを作る。こんな純粹で前向きな子に、心配をかけてはいけない。自分というものを確り持たなければ。

「リオ。もう泣かなくていい。謝るのは私の方だ……。心配かけて、すまなかったな。」

「ぐずつ。……コバルト。」

「手荒な真似をして、申し訳ない。君達のこととは全て、この子から

聞いたよ。……申し遅れたが。私はこの国の王、バンギラスのバルドだ。聖剣士というならば、我が血族について詳しいはず。」

もう一人は王様。タブンネに連れてこられたあと、詳しい事情を聞いてくれたみたいだ。リオの話しが嘘と思えず、仮釈放というカタチで解放することにしたらしい。鍵を開けて、扉が開く。仮だけれど、誤解が解けて無事に解放された。

「さあ、私の自室へ案内しよう。話しはそれからだ。」

「ちょっと待って！王様！」

リオが牢屋の中へ。コバルトの大きな帽子を引きずって、わざわざ持ってきてくれた。

「コバルト、これ。」

「ありがとう。」

## 廊下

華やかな壁、暖かい絨毯。廊下には、写真や花瓶が飾りで置いてあった。宮兵のポケモン達が見回りで歩いている中、聖剣士の三人は堂々と廊下を歩いて行く。

コバルト達が目に入った、一人のドダイトス。王を引き止めて、大丈夫なのかと問う。

「この者達は無害だ。私と少し対談してもらい、最終判断を下す。もしもの時に備え、扉に兵を配置しておけ。」

「はっ！」

王と聖剣士、リオが立ち去るまで頭を下げ続けるドダイトス。立ち去って数分、どこからか“あのオーベム”の笑い声が。

樹木の中、枝をハンモックの代わりにして横たわっていた。ご丁寧な鎧を付けたままで。

ということは、このドダイトスはゾロアーク。この二人、何故潜り込んでいたのだろう。

「簡単に釈放されちゃったあー。このままじゃ、直ぐ鉾山に着いやうよ……。アーク！もうひと芝居頼める？」

「わかった。何をする？」

「尋問を受けても少し時間が足りないから……。あーするんだよ。」

魔女の微笑みを浮かべ、オーベムは笑う。バジルの記憶を別のモノに差し替えただけでなく、宮兵まで騙した。今度は一体……。何をしでかす気なのだろうか。

王の自室。一際美しく、華やかな空間。天井にはモンスターボールを模したシャンデリア。リオは、薔薇模様の赤い絨毯に興味津津の様子。

「君達は四足のポケモンだったね。床に腰かけて構わないよ。」

「失礼します。」

礼儀正す三人。なんとしてでも“悪”のレットルを取りたくて、

一致団結して必死の振る舞い。バルド王はにこやかに頷いた。

「僕の隣においで。」

バジルはリオを呼んだ。大人しく従い、リオはバジルの隣へ。屋根付きベットに腰かけて、バルド王は三人を尋問にかかる。質問は全て、コバルトが一人で答えた。

「名を聞かせてはくれないかな？」

「できません。我々は、歴史に名を刻めるような地位にはいないからです。」

「地位とはなんの？」

「世界の地位です。神がいて、王がいる。貴族に庶民。我々は、何処にも当てはまらない存在……。故に、名を明かすことも、世界にとどまることもできない。役目が終われば、また元の場所へ封じられるだけ。」

“封じられる”の言葉に、バルド王ではなくリオが反応した。コバルト達を見つめ、動揺している。バルド王は、コバルトに質問し続ける。

「封じられる……だと？何故？誰がそうするんだ?!」

「アルセウス様です。」

「アッ……アルセウス?! 神話にしかない、あのポケモンがか……」

バルド王の顔色が変わった。コバルトは、自分達がどうやって封印を解かれるか話した。

「封印が解かれる時、私達は神の声を聞きます。清らかな、やさしき歌を聞くのです。そして、歌が終わる頃には……。いつのまにか、暗闇から外の世界へ出ている。」

「……。」

「バルド王、信じて下さいますか？我々が、聖剣士であることを！」

腕を組み、バルド王は四人を見渡した。聖剣士の三人は、内心ハラハラして落ち着かない。

「……。この子も、名前は言えないと言っていたよ。」

「「?!」「」

「自分は、聖剣士の仲間かもしれないと言ってね？何度も聞いたんだが……口を割らなかった。」

三人は、揃ってリオへ顔を向けた。

「だって、みんな言ってたでしょ？なんとかの騎士の末裔だって。」

「なんかじゃなくて水の……。」

バジルが放った言葉を聞き、バルド王が立ち上がる。目を疑う光景を見ているような、そんな感じがした。

本棚まで小走りで進み、バルド王は何かを探し始める。取り出したのは、分厚い本。青い表紙には、今までにない華やかな刺繍が施されている。銀色の、とても綺麗な刺繍だ。

「これは……。神集しんしゅうという本。世界中の神話をまとめたものだ。確か、この第七章に……。」

パラパラパラ……

「……まず、君達が聖剣士であることを認めようと思う。民からの通報は誤りと判断する。どうか、無礼を許してくれ。」

悪のレツテルが外れ、「よっしやあああッ！！」と、まずはキオルが笑顔で吠えた。両前足を上げて、豪華にガッツポーズ。

バジルはほっと胸を撫で下ろし、一安心。

リーダーコバルトは、冷静な振る舞いを見せている。怒りでヒステリーになった時とは大違いだ。



聖剣士と第四の騎士は旅を始めた。永い永い旅を……。  
宝玉を見つけ、四人が願うとどうだろう。争いが無くなり、みんな  
が笑顔になったのだ。

光が帰って来たことによつて、聖剣士の役目は終わりを告げた。  
聖なる宝玉が悪用されぬよう、四人は剣で宝玉を粉々に砕き、世界  
中へバラまくことにした。

第四の騎士に　　はない。それを知った聖剣士は、この場に残され  
た欠片を分け与え、友情の証とした。  
やがて聖剣士は消え、第四の騎士は行方不明に……。

この神話を聞いた者は、ポケモンの心に“光と闇”があることを知  
るだろう。

そして、聖剣士と第四の騎士……いや、『　　の騎士』に感謝しよ  
うではないか。

今の平和は、この心に灯る光は……。彼ら四人が命をかけ、深い闇  
から取り返してくれた宝なのだから。

「あれ?!」

バルド王は目を疑った。リオが知りたがっている大事な部分が、  
ピンポイントでかすれて読めない。気になり、コバルトはどうした  
のか問う。

「ちょっと待ってくれ……。……………駄目だ。文字がかすれて読めなくなっている。もっと詳しい内容は、ここから先に……。何?! この章もか……。!すまない。管理が悪かったのか、字がかすれて読めなくしまっている。完全に復元できるのは、ずっと先になりそうだ。」

「そんな……。!やっと、ボクが何者なのかわかると思ったのに。」

落胆するリオ。背を撫でて、ゆっくり探そうとバジルが慰める。

「言い伝えでは……。第四の騎士は『水の騎士』という通り名で呼ばれていたと聞く。そして、騎士の子は代々欠片を受け継ぎ……。聖剣士との絆を保ってきた。ヨーギラスだった頃、私の叔父上からそう聞いたよ。」

「リオのこれだね。」

ネックレスを見つめ、リオは話すと照らし合わせる。

「そっかあ。三人との絆なんだね！このネックレスは。」

「確かにそうだった。俺やつと思い出したぜ！」

「僕もさ。蒼騎士は、ちゃんと覚えてたんだよね？」

頷き、コバルトは記憶をたどって話し出す。

「あの旅をしたことによって、誰も知らなかった聖なる宝玉が知れ渡った。だから、悪用を恐れて砕いたんだ……。それが今、悪の手に渡ろうとしている。」

「……はっ！！そっだ軍隊は?!」

「「あッ!!!」」

軍隊の存在を思い出し、リオが立ち上がる。バジルとキオルだけが反応し、今度はコバルトがバルド王に質問した。

「バルド王。ここ最近で、不穏な動きをするポケモンは見ていませんか？我々は、この子を襲った謎の組織と一戦交えています。」

「組織？フレイマウンテンにいと噂の、あの連中のことか？」

四人は顔を見合わせる。コバルトとリオがまだ聞いていない情報を、キオルが同じように話した。

「そうか……。」

「欠片があつたらどうしよう!!！」

あたふた走り回るリオ。コバルトが後ろ脚で受け止めてなだめる。  
“欠片”と聞き、バルド王は顔をしかめた。

「民に害は与えていないようだから、私は不干涉だったのだが……。  
どうやら厄介な連中のようだな。宝玉の欠片を使って、何をしよう

「とこののだ?!」

「それは……。あれ？」

「バジル？」

何を言おうとしているのか、バジルは自分のしたことを不思議に思った。情報は収穫していないはずなのに、なんか引つかかる。収穫はあったような、そんな気がした。

「おかしいな……。」

「どしたあ？」

「バジル、さっきから様子を変だぞ。」

「あ、ううん。なんでもないよ……。ごめん。」

「……。バルド王、我々は行きます。奴らの目的はわかりませんが、

悪であることは確か。必ず、止めてみせます。」

「うむ。私からも頼む！この世界で何が起きようとしているのか、それを調べて来てくれ！！フレイマウンテンへの門は、ドンカラスに頼んで開けておく。……あと、これは僅かだが持って行ってくれ。」

三人は立ち上がり、バルド王から一人づつ小袋をもらった。キオルが中身を確認すると……中にはお金が。

「Pポケだ！！」

「やったね！」

「バルド王、ありがとうございます。では、準備ができ次第鉾山へ向かいます！」

「君達の無事を祈っている。それと……。」

神集を棚へ戻し、リオの元へ。ローブごしに頭を撫でながらリオに誤った。

「すまない……。力になれなくて。北と南、西の国へ行けばまた神集と出会える。自分のことがわからなければ、何もないと同じだ。国は十二カ国ある。王に会えるかは君次第だ……。頑張つて探すんだよ。」

## イメルラ城下町

### 中心街

街灯の下、バジルとキオル、リオの三人はコバルトを待っていた。使えそうなアイテムを買いに行ったつきり中々帰って来ない。コバルトを待っている最中、リオはまた落胆していた。町中を歩き疲れたのか、バジルの背中でごったりしている。

「焦っても仕方ないよ。ゆっくり探そう。」

「そーだぞ！軍隊を追ってりゃあ、必然と神集に出会えるさー！」

「うん。」

今回で得たのは、リオが持つネックレスは代々受け継がれた絆だ  
ということ。

自分が、水の騎士の末裔だというのは本当だったこと。

字がかすれていて、もっと詳しい内容はわからなかったが、神集  
を求めていれば必ずわかる。落胆と希望とで、リオの心はグシャグ  
シャ。

「待たせたな！」

「「遅い。」」

「すまない。道に迷ってしまったってね……。」

バジルに説教されているが、コバルトは上の空。自分が来た道を  
もう一度確認し、何か考えている。

げしッー!!

「ぐはっ!」

「人の話しを聞け!」

頬を馬蹴りされ、コバルトがヨタつく。

「考え込むとすぐこれなんだから……。さ、フレイマウンテンへ行こうー!」

「あ……ああ。」

頬に赤く、バジルの足跡が残っている。  
自分の性格が災いを呼び、つくづく災難なコバルトであった。

T o b e n e x t



### 3：聖剣士と神集（後書き）

#### 【次回予告】

リオ

「いよいよフレイマウンテンへ出発！

……あれ？そういえば、コバルト達の鎧は？

ボクも騎士なんだから、鎧があるんだよね？

次回もお楽しみに！」

聖剣士とリオ

「剣よ、闇を切り裂け！！」

## 4：vsリザードン

フレイマウンテン

頂上

天に届くのではないかという高さ……。頂上の踊り場には、リザードン、アーボック、ハブネーク、オーベム、ゾロアークの五人がいる。どうやら、また会議をしているらしい。

「えー。いつも来てくれるボスは来ないのー？」

「あのお方にも仕事がある。我らだけで始めよう。」

オーベムは一人不服な顔をしている。

前回の会議で、彼らは聖剣士をどうするか話し合っていた。決まったのは、ミュシエーニで足止めをすること。先手を打てば、少しでも有利に進めると判断したのだ。

「岩窟の騎士がまだ情報を握っていたとは……。誤算だったな。」

「新緑の騎士みたいに詳しいことじゃないから、ウチの力は必要無いよ。てゆうか、どうせ邪魔しに来るでしょう？ たぶん、もう鋼の騎士は幻影迷路から抜け出してる。こっちへ向かっている頃だろうさ……。」

やる気なさそうなオーベム。背伸びをして堂々と大あくび。彼女の意見を聞き、ごもつともだと、アーボックは顔をしかめた。

「だったら、持ち場に戻って欠片を探してた方がいいよな……。なあハブ？」

「だな。」

「決まりだな。フレイマウンテンのことは任せてくれ。みんな、次の持ち場へ向かえ！ 聖剣士より早く、光の欠片を見つけ出すんだ！」

リザードンの指示で、鎧のポケモン達は解散。それぞれの移動手段で立ち去る。

仲間達を見送り、リザードンは内部へ。冷酷な微笑みを浮かべ、発掘現場であるフロアを目指した。

## フレイマウンテン

### 鉱山への道

「ボクは、水の騎士！このネックレスはー、三人との絆！ボクの一族って、コバルト達と世界を救った騎士なんだね。……これが終わったら、またいなくなっちゃうの？」

バジルの背中で、リオは得た情報を復唱。少し顔を傾け、コバルトは言う。

「大丈夫。まだまだ先の話した。リオは、私達が守るから。気にするんじゃない。」

「ありがとう。……ねえ、みんな。ボクも封印されるのかな？だって、騎士なんでしょ？」

コバルトは目を瞑り、なにも言わない。彼の左右にいる二人の顔は曇る。忘れちゃったと、バジルは苦笑い。

「じゃあ、神集が見つかったらわかるんだね！」

「そうだな……。そろそろ門に着く。鎧を纏うぞ。」

「了解！」「」

「リオ、ちょっと降りてて。」

「うん。」

立ち止まる三人。バジルの背中から降りたりオは、三人の様子を伺った。

目を瞑り、各々違う呪文を唱える。

バジルは、風と若葉の渦を纏いばく転。宙を舞うと風が止み、鎧姿の騎士が現れた。

コバルトは眩い光を纏う。前足を蹴り上げ、地へ叩きつける。光がガラスのように弾け飛び、鎧姿へ。

キオルは、岩のドームに身を包む。しばらくして、自分の周りから来た岩を突破。壁を抜けた頃には、鎧を纏った姿に。

「わぁー……。」

「おっと。勢い余ったぜ！」

ちょっと離れた場所で、キオルが笑っている。彼の猪突猛進ぶりには、コバルトはもうお手上げの様子。うつ向いて首を左右に振っていた。

バジルはリオへ歩みより、視線を合わせてから話す。

「どっしりするっ、歩くっ。」

「あ、うん。」

「さあ、門を目指そう。欠片をみすみす渡してなるものか……。」

冷静なコバルト。小走りで先を行く彼を追うは、三人の騎士。岩壁の間を走り抜け、着いた場所は鉄の門。開いている門の前には、ドンカラスが待っていた。

「聖剣士と、第四の騎士ですね？国王様から話しは聞いています。さあ、中へ。」

道を開け、ドンカラスは四人を見守る。岩にまみれた獣道、闇が潜む静寂……。コバルトを先頭に、四人はフレイマウンテンへ歩を進めた。

\*\*\*

## フレイマウンテン

獣道を抜けた先は、崖の上。斜め下に見えるは鉾山への出入口。

「うわぁ！大きい山！」

「ここがフレイマウンテンかぁ……。あー、コバ・じゃなかった蒼騎士？」

「王室の時といいお前は……。気が緩み過ぎだ！もう少ししっかりしろ！」

「わりいわりい……。でよ、あれ兵士だよな？」

見下ろす先には、鉄の鎧を纏うポケモン達。物騒な武器を持って、入り口を見張っている様子。強行突破ならドンと来い！と、キオルは自信満々で威張る。冷静に策を練るコバルト、兵士の種族と手持ちの武器が何なのか模索。

サイドンが七人か……。武器はアックス。大きな斧が相手だが、キオルに任せて大丈夫か？いや、コイツは猪突猛進バカだ。なんとかするな。

「キオル、斧を持つサイドンはお前に任せる。一人でできるな？」

「もちー！」

あとは……入り口を塞ぐペンドラが三人。特に武器はないか。特性には注意しなくてはならないな……。バジルと私でなんとかしよう！

「バジル……。」

「言わなくていいよ。わかってる。リオ、僕にしっかりついて来てね？！」

「うん！」

地を力一杯蹴り上げ、崖を飛び降りる四人の騎士。つられて飛び降りたりオだが、怖くなってパニック状態に。足をバタバタさせて戸惑っている。

「よっ……。」

空中からコバルトに頂を掴まれ、宙ぶらりん。華麗に着地した聖剣士は、軍隊に向かって走る。

「き……来た！！聖剣士だーッ！！」

「みんな構えろ！！フレイマウンテンへ入れるんじゃないぞ?!」

気づいたサイドン達が迫り来る中、意気揚々とフルスピードで駆け抜けるは、岩窟の騎士キオル。七人相手に勝てるのだろうか？

「オラオラオラオラオラオーッ！！どおけえーッ！！」

一九〇センチの巨大が突っ込む。ボウリングのピンが如く、サイドン達は宙を舞った。一瞬で七人もダウンさせるこのパワー。流石である。

「先に行け！」

「オーケー！！！」

ペンドラー戦の前に、途中でコバルトは立ち止まる。リオを下ろすために。

「水の騎士、これからは名前を伏せて呼ぶからな？四人の時は、名前で呼び合おう。」

「うん！」

「では、初バトルへ行くぞ！！！」

リオの初バトル。……だが、自分な何の技が使えるのかわからない。とりあえずは、“体当たり”と“砂かけ”のみ使用することに。

「やあー！！！」

鉄鎧のペンドラーに突っ込むは、水の騎士リオ。体当たりしたはいいが、装甲の固さに負けて自分から跳ね返されてしまう。

岩の大地で、ボールのように転がるリオ。ピタリと止まったが、目を回したのか動かない。中央のペンドラーは狙いを定め、“ポイズンテール”を放とうとする。

「まだ子どもだってんなら、第四の騎士からやれそうだなッ!」

「させると思っかい?!」

「?!」

バジルもペンドラーと応戦中。“ハードローラー”をジャンプでかわし、空中で中央のペンドラーに照準を合わせた。角を“リーフブレード”を浴びせる。

「うわぁー!」

「よし!……ぐあぁッ!」

背後からペンドラー。ジャンプし、背後を取って頭で叩き落とすた。

叩き落とされたバジルは、体が痺れて動けない状態に。

ズシンッ

「俺を忘れないぞ？新緑の騎士……。」

「ぐ……う……。」

バジルッー！

どう倒したかはわからないが、コバルトはもう戦いを終わらせていた。“メタルバースト”で中央のペンドラーにとどめをさし、バジルの襲う兵士へ体当たり。

本調子に戻りつつあるコバルトのタックルは、ペンドラーをボール扱い。吹き飛んだ衝撃で目を回し、ペンドラーは倒れている。

「はあ……………はあ……………。あの馬鹿はどうした?!」

「あそこ……………」

寝たままのバジルが見つめるのは、フレイマウンテンの壁にめり込んでるキオル。勢い余って完全に止まれなかったようだ。

「……………(汗)……………」

\*\*\*

なんだかんだで内部侵入。コバルトにこっぴどく叱られて歩くキオルは、今回は反撃している。

「騎士として恥ずかしいと思わんのか?」

「止まれなかつたんだからじゃあねえだろうがよお！俺様の突進力があるから、チームが成り立ってんじゃないのか？！スピードにパワーにアンタの知性！な？！」

「諸刃の剣かお前は……。」

「なんだとコラアツ！！！」

「ちよつと二人共！リオがいるんだから考えなよ？！ごめんねリオ……。怖かつたろう？」

バジルが見ているのは、後ろ。二人もつられて後ろを見る。すると、前足でバジルの後ろ足にしがみついて震えているリオがいた。深く反省した二人は、声を揃えてリオに謝る。

「「すまない……。」」

「もう喧嘩しないでね？」

声まで震えている。相当怖かつたのだろう。たぶん、ロープの中

で涙目になっているはずだ。

四人の足音は、洞窟内で反響して響き渡る。左右の壁には、電球がついたヒモが取り付けられていた。最近のものだろう、辺りがとても明るい。

赤い岩があちこちに転がっていて、後ろにはダンゴロやイシツブテが隠れている。コバルト達を不思議そうに見ていた。

「ここに住み着いてるポケモン達だね。」

「あの軍隊、危害は加えていないようだぜ？ 蒼騎士、悪か正義かどー判断するよ？ なんかやけに曖昧だぞ……。」

確かに。ダンゴロ達に危害は加えていないようだ。みんなピンピンしている。

光の欠片を求めている理由、それがわからないことには話しにならない。コバルトは、うつ向いて目を瞑る。

「今は、前へ進むことだけを考える。奴らの企みを明かすその時まで……。」

「蒼騎士。」

バジルから離れ、リオはコバルトの横について歩き出した。小さな脚で一生懸命歩く。

「ごめんなさい。足手纏いになっちゃって……。みんなも。」

「君はまだ未経験者だ。仕方ない。これから徐々に慣れていくとい。い。」

「うん。」

「待っていたぞ！！聖剣士達よ！！！」

洞窟に響く男性の声……。コバルトを抜かす三人は身構えた。敵はどこにいるのか、バジルとキオルで辺りを見渡す。

現在位置は迷路の洞窟。小さな広間に、枝分かれした道がいくつも

ある空間だ。声はどこから？

「そのまま真っ直ぐくるといい……。俺はそこにいる。」

「……………」

「畏だと思っているだろうから言うが、俺はそんなエグい奴じゃない……。騙されたふりして来てみるんだな。」

「どつする、蒼騎士？」

不安がるリオに言われ、コバルトは少し考える。キオルは畏だと五月蠅が、バジルは行こうと言う。二つの意見に挟まれても、冷静に構えているコバルト。揺るがない鋼の心は、この程度ではびくともしない。本当は。

「……………」。本調子に戻ってやがるぜ、蒼騎士。檻の中で怒り爆発したのが嘘みたいだ。」

「黙れ岩窟。」

「だって、初めてのいじりネタだから楽しくて……。つい」

ギロツッ！

「サアーセエン。」

さて、どうしたものかと悩み出す。こうしていても仕方ないし、行くべきか？ 罨があつた場合はどうする？

考え込むこと二分。意を決した鋼の騎士、コバルトは歩き出す。三人は何も言わずに後を追つた。

明るい洞窟の中、たまに影が敵に見えて警戒してしまう聖剣士。リオは好奇心全開でキョロキョロ。周りの状況を把握していた。

洞窟を抜け、大きな広間へ。障害物が無い広々とした場所だ。

聖剣士とリオが見つめる先は、高台。その上で見下ろす、赤い鎧のリザードン。専用の兜を片腕で抱えていた。

「随分と遅かつたじゃないか。待ちくたびれたぜ？」

「岩窟の騎士の戯言に付き合っていてね。……さて、聞きたいこと

は山ほどある。貴様は、紫の鎧を纏ったポケモンの仲間か？」

「ご明察……。俺の名はバースト。炎部隊の騎士<sup>リーダー</sup>だ。この次は、目的はなんだ・だろ？教えてやるよ。」

闇に満ちた形相で、リザードンは聖剣士と会話。ゆっくりと兜を被り、再び聖剣士を見据えると……。

「この俺に勝てたらなあッ！！」

叫び、翼を広げて空を飛ぶ。バジルとコバルトへ狙いを定め、“火炎放射”を放った。

「やばー！！」

「うおおー！」

「きゅわー！」

コバルトを弾き飛ばし、バジルも一緒に押し倒す。これによって、火炎放射はキオル一人で受けることに。

「ち！」

「とおりゃッ！！！」

キオル渾身のビッグジャンプ。リザードンの懐めがけて飛んでいき、体当たりが見事命中。守りを捨てて突撃する技、“インファイト”だ。

「ぐあああ！！！」

落ちるリザードン。攻撃したはいいが、顔面から落下する岩窟の騎士。結果、顔から半分が地面に埋まってしまった。コバルトに馬鹿と叫ばれ、体当たりをもらって脱出。

「すまん。」

「相変わらず、猪突猛進だね。岩窟の騎士は。」

「それが俺様だ！……リオ、ちょっと手を貸してくれ。」

何故かコバルトの背中に乗っているリオ、意味がわからず前足を一つ差し出してみる。

「ちげえ！協力してくれってこったあ！」

「へ？」

「相手は炎タイプだ！水の騎士ってなら水技、使えるだろう？」

「ごめん。体当たりと砂かけしか……。」

マジかよ

落胆。キオルは珍しく悩んだ。

相手は炎・飛行タイプ。水タイプの技なら簡単に倒せる相手だが、水の騎士はあいにく技がほとんど使えない。

「なッ！蒼騎士?!」

「蒼騎士!!相手は炎タイプなんだよ!!」

バジルとキオルが止めるが、コバルトは歩を止めない。距離を二メートル残し、コバルトは背中で語った。

「聖剣士とあろう者が、相性<sup>ご</sup>とときで怯えるでない!!」

「蒼騎士……。」

リオは、コバルトの言葉に共感した。意を決して前に立ち、一緒に戦うよと言った。

「蒼騎士は、ボクが守る！」

「……！……ふふ、なんとも小さな護衛だな。」

「水の騎士にそう言われちゃあ……」

「俺様達も、やらざるを得ないよな?!」

バジル、キオルともに本調子を取り戻したようだ。彼らの気迫は、リザードンを押ししている。

「我に続けッ!! 聖剣士達よ!!」

コバルトの号令で、地を蹴って進む。コバルト、バジル、リオで身構えるリザードンを飛び越え……。リザードンが気を取られている隙に、キオルが真っ正面から突進。そのまま壁へ叩きつけた。

「やれ蒼騎士！」

「ぐっ……そうは、させるかぁッ！！」

痛みに耐え、リザードンが大口を開ける。放った技は“ブラストバーン”。“火炎放射”よりも強力な炎が、岩窟の騎士を襲う。いくら岩タイプでもこれはキツイ。

「ぐああぁッ！！」

「やめろー！！」

リオが駆ける。まだタイミングが早いと、バジルは止めようとしたが、やめた。“エナジーボール”をリザードンの顔面目掛けて放ち、“ブラストバーン”を封じ込める。少し遅れて、リオがリザードンの脚に“体当たり”。無論、力負けて転がってしまう。

「水の騎士！」

「うーん……。目が回る。」

「鍛えなきゃだね。蒼騎士！！今だよ！！」

バジルの合図で、コバルトは目を瞑る。額に光を集め、正義の心を高めていく。

目を見開いて、光球を真上に飛ばす。光は形を成し、武器に変わった。柄は中央、左右に刃が付いた青い剣だ。刃は、先にいくに従って幅広くなり、三日月のような反りがついている。

落ちてくる武器を口でキャッチし、蒼騎士コバルトはゆく。刃は左右の向きが逆で、少し斬り憎そうな作りだった。

「武器?!」

「ただの武器じゃないよ。見てて。」

リオは、バジルに頂を掴まれている。リザードンへ向かって行くコバルトを見守り、何が起ころのだとハラハラする。

武器を見て、リザードンは焦り暴れる。キオルの怪力が邪魔して

身動きが取れない。

「くそ！離れやがれ！」

手で引き剥がそうと試みるが、二〇〇キロオーバーの巨大は中々動かなかった。

「そう簡単に……剥がされてたまるかよお……！」

「くそお……！離れろ、離れろお……！」

拳で叩かれるキオル。耐えて耐えて、コバルトが来るのを待った。ギリギリの距離になって、キオルはリザードンから急いで離れた。解放されても、もう遅い。

「正義の鉄槌、“聖なる剣”……！」

青白い輝きを放つ刃で、リザードンの右肩から斜めしへ切り裂いた。不自然な事に、斬られても血が出てこなかった。確かに貫通したのに、傷も無い。だがダメージはある。白目を向いたりリザードン、そのままずり落ちて動かない。気絶したのだ。

「勝った……の？」

「うん。キオル、お疲れ様。」

バジルが振り向いた所には、でろんと大の字で寝そべっているキオルが。力尽きて脱力モードになっている。

「今回は散々な目にあっただぜえ……。あーもーいや。」

「御愁傷様。」

「バジル、コバルトの剣って一体……。」

コバルトの不自然な剣。これは、【スカイソード】という剣。コ

バルトにしか扱えない剣で、殺めるといふ概念が存在しない。よつて、斬ることは可能でも、生きているモノは絶対に殺せない。心に潜む【闇】だけを斬る、まさに正義の剣なのだ。

特別な力を秘めた剣を持ったまま、コバルトは三人の元へ。

「一応終わらせた。バジル、お前の力でアイツの動きを封じてくれ。」

「了解。」

穏やかな対応。まずはリザードンの近くへ寄り、バジルは首の飾りを光らせる。飾りは光のツルに変わり、リザードンをグルグル巻きに。作業が終わると、光を干切って、元の飾りに戻した。

ちよいキツめに巻いた光りのツルは、茨いはつに変化。ツルのムチならぬ茨のムチだ。

「オッケー。」

「あとは、情報を聞き出すだけだ。キオル、寝るなら寝ている。今なら許す。」

「サンキュー。少し仮眠取るわ。」

言っ、キオルは一瞬で眠りについた。相変わらず喧しいイビキを立てながら。

思わず耳を塞ぐリオ。役に立てなかった自分が情けなくて、ちょっと落ち込んでいる。技だつてあまり使えないし、レベルも低い。こんな自分が騎士でいいのだろうか？

後ろ向きの彼に、コバルトがすり寄る。ローブごしだが、毛繕い。

「大丈夫。これから鍛えていこう。」

「むぎゅ〜。コバルト、くすぐりたいよぉ〜。バジル、もう降ろして。」

パタパタもがくりオだが、二人は中々言うことを聞いてくれない。コバルトに足が当たっても、兜があるからダメージ無し。なんだか、遊ばれているようで。

次回、敵の正体が明らかに。聖剣士達の旅は、正義へ向かい続ける  
！！

T o b e n e x t

## 4：vsリザードン（後書き）

### 【次回予告】

リオ

「悪の秘密組織、

【闇纏う騎士団】。

目的は何？

光の欠片で、一体何をしようというの？！

次回もお楽しみに！」

聖剣士とリオ

「剣よ、闇を切り裂け！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5793z/>

---

聖剣士物語

2012年1月6日23時46分発行